Newspaper in Education

静岡新聞で学ぼう

静岡新聞

富士川濁り アユ減「警鐘」

専門家、地元企業 15年度調査報告

静岡、山梨県 把握も対策せず

富士川の濁りを主因として天然アユの資源量が危機的水準にまで減少しているとの報告書を2015年度、静岡市清水区の企業などがまとめ、濁りの影響に警鐘を鳴らしていたことが23日までの関係者への取材で分かった。報告書は静岡、山梨両県での共同調査の必要性を強調。両県は複数の部署で内容を把握していたとみられるが、対策は取られなかった。富士川の濁りは駿河湾産サクラエビの記録的不漁との関係が指摘されている。

＝関連記事27面へ

サクラエビ異変

富士川のアユ減少に関する報告書の主なポイント

- 自力での回復は相当に難しい資源水準
- アユを含めて魚類の個体数が著しく少ない
- 原因として可能性が高いのは川の濁り
- 濁りは、支流の早川（山梨県早川町）が主要な発生源の一つ
- 山梨県と行政の垣根を越えた協力が必要

リポートは「平成27年度 天然アユを指標とした富士川の環境保全調査報告書」。小型産業用ロボットメーカー「アイエイアイ」（石田徹社長）がCSR（企業の社会的責任）として、高知県の四万十川など全国の河川でアユの生態調査や漁場診断などを行う専門のコンサルタント、たかはし河川生物調査事務所＝高橋勇夫代表、同県香南市＝に依頼した。

河口から約20キロ上流までの区間で、目視観察や潜水などを行い、濁りや産卵状況、魚道の機能を調査。国土交通省のデータに基づき、濁り具合の指標となる浮遊物質量（SS）の10年間（05～14年）の平均値（1リットル当たり30ミリグラム程度）を「通常濁りが少ない時期に調査が行われることを考慮すると、異常な高さ」としている。

潜水観察を通じ、富士川本流の対象域のほぼ全体で川底に砂泥の堆積が見られ、泥分沈着により光合成が妨げられて餌の藻類（コケ）の生産が低いことや、河床の石が砂礫（されき）に埋まりアユの産卵の阻害要因と考えられることなどを詳述。対象域の生息期待量80万匹に対し実生息数は約2割の18万匹にとどまっていると算定した。

約30年、富士川でアユ釣りをしている山梨県南アルプス市の40代男性は「仲間うちでは富士川は〝死の川〟というのが共通認識。興津川や狩野川は天然アユが遡上（そじょう）するのに富士川は上らない。多くが富士川を避けている」と話す。

富士川本流の一部や支流の漁業権を持つ芝川漁協（富士宮市）が16年、内容に関する報告会を開催。同漁協は静岡、山梨両県の関係部署や国土交通省の事務所などに計100部配布した。

（サクラエビ異変取材班）

◇

25日付朝刊に特集を掲載します。

QRコードを読み込むと調査報告書を閲覧できます。

富士川水系で釣り上げられたアユ＝20日、山梨県南部町

〝見張り番〟機能 弱く

（解説）境保全に関する問題の背景の一つに、県内本流に長く漁業権が設定されてこなかったことが挙げられる。河川の〝見張り番〟として強い権限を持つ漁協がない中で環境を守ろうとボランティアが汗を流してきた川でもあり、心ある市民の声が国や県の動きに反映される仕組み作りが今後の鍵を握る。

県内の本流は山梨県境から河口まで約18キロ。県史民俗調査報告書などによると、戦前は漁業が盛んだったが、河川環境の悪化とともに低迷。2014年に芝川漁協が富士宮市内の約5キロを漁場とするまで漁業権が設定されず、富士市境から河口まで約13キロは今も漁協がない。たかはし河川生物調査事務所（高知県）の高橋勇夫代表＝河川生態学＝は「全国的にも異例。問題に対し声を上げる意味で漁業権がないのは致命的」と説明する。

旧富士川町を中心に漁協設立の機運が一時高まったが利水者との話がまとまらず断念。富士市民らが漁協に代わり環境保全などに取り組み、濁りに関しても行政サイドとの連絡会で問題提起してきたが、対応には至らなかったという。

一方、同じく天然アユの資源水準が落ち込んでいる天竜川では、天竜川漁協と流域のダムを管理する電源開発が中心となり、有識者とともに環境の保全と再生を目指している。

2019年
6月24日
朝刊

① 鮎の生態を調べてまとめよ。

② 鮎を季語にして俳句を一句、また「鮎」の語を詠み込んだ短歌を一首、創作せよ。

③ 富士川の環境を保全する具体的対応策を考察せよ。

年　　組　　名前

作問者：NIEアドバイザー　実石 克巳（静岡県立静岡高校　教諭）

（高校／国語）

＜参考＞①＝生物学に関する問題、②＝文学に関する問題、③＝環境学に関する問題